日本建築学会大会学術講演梗概集
（東　海）2003年9月

19世紀末ブリュッセルにおけるパブリック・アート委員会の活動に関する研究

正会員　　○田中暁子*

ベルギー　　パブリック・アート委員会　　シャルル・ビュルス
ブリュッセル　国際パブリック・アート会議

1.はじめに

1890年代から第1次世界大戦にかけての近代都市計画の黎明期に於いては、数多くの国際会議が開催され、知的交流が活発になされていたことが知られている。そのような時期に、「初めてアーバン・デザインについて話し合われた会議」[1]が、1898年にブリュッセルで開催された第1回国際パブリック・アート会議であった。この会議にはベルギーのみならずヨーロッパ各国やアメリカから著名な都市計画家が参加し、主に非ドイツ語圏諸国にパブリック・アートの考え方が展開する端緒となった[2]。

本稿では、当該会議の主催団体であるパブリック・アート委員会の活動を概観し、その意義を明らかにする。

2.街路及び公共物に適用された芸術に関する団体の目的

画家のEugène Broermanは、「僅かなバラエティや装飾を与えるだけで街路はピクチャレスクになるだろうに、多くの家が平凡な直方体であることに失望を覚え」、「窓や扉、看板など、かつて芸術が高い位置を占めていた町々の細部に注目する」ようになり、「街路において退化してしまった芸術を再生させ、新たな命を吹き込む必要がある」と考えるようになった。

そこで彼は、「街路及び公共物に適用された芸術に関する団体（Œuvre de l'Art appliqué à la rue et aux objets d'utilité publique;以下、団体と記述)」を1894年に設立し、当時のブリュッセル市長シャルル・ビュルス(Charles Buls)が会長に就任した。

「芸術家の仕事が一般的な利益から着想を得る実際の街路を通す際に、芸術家間に競争心を生み出す。現代の公的生活に役立つように得られた全ての進歩に芸術的な形を与える。つまり、人々への教育の様々な要素を構成する絵画的な美術館へ街路を変化させること、及び、公権力が支配する全ての領域において、現代的考えに芸術を適用しながら、芸術がかつて担っていた社会的役割を取り戻させること」が、設立の目的として掲げられた。

設立に関わったメンバーは、Jean Robie (画家,1821-1910)、Jules de Borchgrave、Alfred Cluysenaar (画家,1837-1902)、Maurice Frison(建築家)、Julien Dillens、Jef Lambeaux(彫刻家,1852-1908)、Edmond De Vigne(建築家)、Victor Horta(建築家,1861-1947)であり、ブリュッセルを中心に活躍する芸術家の集団であった。

団体の設立目的は、急速に広まり、設立から1年でブリュッセル以外からも会員を集め88人が会員として登録した。ベルギー各都市に活動は伝播し、1897年に団体は全国パブリック・アート委員会(Comité national de l'Art Public :以下、委員会と記述)へと変化することになる。

また、1896年2月15日からは団体の機関紙であるL'Art Publicが発行され、ベルギー国内のみならず、フランスやイタリア、イギリス、アメリカでも読まれるようになった。

以下、団体と委員会の活動を見ていくこととする。

3.団体とパブリック・アート委員会の活動

3.1 街路及び公共物に適用された芸術に関する団体の活動

1894年4月にギャルリー・サン・チュベールに絵が展示され、25,000人が1フランの入場料を支払い鑑賞した。これがBroermanによって開催されたfête lumineuseというイベントであり、その際に団体が設立された。

同年、ブリュッセルの新しい道路であるジョセフ・ストゥバン通り(Rue Joseph Stevens)沿道の最も美しい建物と、様々な公共物(噴水、街路灯、旗竿、新聞スタンドなど)の公開コンテストを団体とブリュッセル市が共同で開催した。このコンテストによって団体の設立目的を実際の町の中で実現させようと試みた。しかし、結果は芳しいものではなく、一等賞は該当なしであった

1895年には、団体単独で開催する初めての事業として現代・古代芸術的看板展示会を開催した。その中で「商業の必要性と経済性に芸術は応えられないという世間に広まっている定説」に対抗することを目標として①看板計画コンペ、②実施された看板コンペが行われた。この展示会により、「看板は商業施設の装飾の一部分とみなされるべきで、この点を失敗すると、建築的調和が失われ、建物に被害を与える。更には宣伝効果が得られることもなく公道を醜悪にする」という主張を例証することが出来た。

1896年には、前年と同様に街路を装飾する一部である公共照明器具のコンペが開催された。ブリュッセル博覧会ポスター、牛肉エキス会社ポスター、ブリュッセル博覧会記念切手、硬貨のコンペも開催された。

1897年には、ブリュッセル万博にあわせて、パブリック・アートの展示をすることに力が注がれた。そこでは、団体の現在の活動と、かつて芸術が担っていた役割を明らかにするための展示がなされた。後者の目的をかなえるために、歴史的なものが多く展示された。アントワー

The activity of Comité national de l'Art Public around the turn of the Nineteenth Century

TANAKA Akiko

プ、リエージュ、ゲント、ブリュージュ、ナミュールなど多くの都市がこの展示に参加した。

これ以降、団体に対する関心が高まり、1897 年末から 1898 年初頭にかけて全国会議が開催された。ビュルスが議長を務め、国内の重要な都市や芸術団体から代表者が参加した。この会議で、全国パブリック・アート委員会を設立すること、コミューン内でパブリック・アート美術館の設立を認めること、第 1 回国際パブリック・アート会議の開催することが決定されたのである。

3.2.全国パブリック・アート委員会の活動

委員会の活動は大きく 2 つに分けられる。1 つは、都市改善の新規プロジェクトが提出された際に、芸術的な側面からプロジェクトを考えて評価すること、もう 1 つは、街路を美しくするための法律制定に向けた運動をすることである。

前者の例としては、2 つの重要な場所を繋ぐためのブリュッセルのロンバール通り(Rue du Lombard)の延長計画の際に、委員会はプロジェクトを綿密に再調査したことが挙げられる。計画された道路により影響を受けるポエラール広場(Place Poelaert)からのブリュッセルのパノラマ景や、道路が作り出す最高裁判所への眺めや、道路に沿った 2 つの教会の見え方、市庁舎への眺めを、詳細に検討した。

後者の例としては、衛生や、公共の福祉に個人の自由が制限される他の事柄に対して市当局が権力を既に持っているように、広告物の公道での氾濫を抑制したり、是正したりする権利を市当局が持つための法律制定を訴えたことが挙げられる。その際に、「ブリュッセルの中央大通り沿いの建物の最も美しいファサードに対して市が賞を与えても、建物の占有者が美しいファサードを巨大で気味の悪い広告で覆うことを許されたら、無意味なものになってしまう。著者が自書に対して持つ、もしくは、画家が自作の絵画に対して持つのと同じような権利、つまり自分の作品を他者からの汚損や損害から守るという権利を、建築家も持つべきである」と訴えた。

4.団体と委員会の活動に対する評価

以上、委員会とその前身である団体の活動を見てきた訳であるが、ここで、それらの活動に対する当時の評価を見ておこう。

団体の初期の活動であるコンテストの結果に対して、団体への期待と得られた結果のギャップの大きさから幻滅が生じ、団体を「街路に芸術をめっきした団体(Œuvre de l'art *plaqué* à la rue)」と中傷する者もあった。設立者である Broerman の独裁的な態度に対する反感も一因と考えられているが、オルタは芸術的レベルの低さを理由に団体を脱退している。

しかし、著名な美術史家の Fiérens-Gevaert は「像や記念物を増やすのではなく、建造物や室内装飾、給水場や街路灯、ランタンなど日常生活で必要とされる動産に、出来る限り優雅な形を与え、都市の小さな場所に気を配り、総合的調和と絵画的様相を作り出すことが肝要である」と、ラスキンを参照しながら団体の活動の重要性について述べた上で、「若い団体への期待の大きさとその成果のギャップに幻滅することはない。彼らが成し遂げようと活動を続けていることの影響は明白であるし、その活動が再生に繋がる事は間違いない」と評価した。「新しい思想を広め、改革への関心を高めた点で成功を収めたと言える」、そして、団体の活動と、ビュルスの都市設計思想、ブリュッセル市の都市整備、芸術家の宣伝、住民間に起きた競争心などが相まって「集団的美的感覚が真の復活を遂げ、ベルギー全体において建築家が装飾の細部まで芸術性を追い求めることが可能になった」と述べている[3]。

アメリカの City Beautiful Movement の主導者であるチャールズ・マルフォード・ロビンソンは、「全国パブリック・アート委員会が如何なる芸術的試みよりも興味深いものである。委員会は、自治体の事業に芸術を取り込み、都市生活の日常に美を持ち込み、以前は低かった公共水準を高めたのである」と述べている。

5.まとめ及び今後の課題

以上のように、パブリック・アート委員会とその前身の団体の活動は、コンテストや展示会の開催により人々の都市の美しさへの注意を喚起する活動から始まり、徐々に自治体による都市改善へ芸術という視点を取り入れることや都市の美を維持するための法制度の整備へ向けた働きかけをすることへ活動の幅を広げていったことが明らかになった。

それらは Fierens-Gevaert が指摘したように、団体の活動のみではこれ程までの影響力を持ち得なかったのであるが、ブリュッセル市が当時行っていた都市整備がこの団体の設立趣旨を体現するようなものであったために可能になった。

以上を踏まえ、ベルギーにおけるパブリック・アート運動の全体像を捉えるためには、当時のブリュッセル市長シャルル・ビュルスの都市設計思想について考察することが必要であると考える。また、その運動が各国の都市計画家に発信された場である国際パブリック・アート会議を考察することにより、全世界的なパブリック・アート(英語圏における civic art も視野に入れることとする)の動向を把握することが可能となろう。

以上に挙げた研究の課題については、次稿以降に委ねたい。

■主要参考文献■

1 Anthony Sutcliffe, *Towards the Planned City:Germany, Britain, the United States and France 1780-1914*, 1981

2 G.R. Collins et al., *Camillo Sitte and the birth of modern city planning*, 1965

3 H. Fiérens-Gevaert, 'L'Art public', *Revue de Paris*, 1897

*東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻博士課程

*Graduate School, Dept. of Urban Engineering, Faculty of Engineering Univ. of Tokyo